

110 筆禿迷鹿癩 筆 禿するは鹿癩に迷えばなり

【十二段】

この十句では、「儒家」としての矜持も意味をなさない太宰の謫居生活で、我が身の苦悩の離脱を試みようとして「仏教への思い」を詠う。そこには太宰の地で道真自身が初めて味わう長雨の続くうっとうしい梅雨から夏の猛暑の時候の中に身を置くことで生じた心象風景が描かれているのである。

111 草得誰相視 草は誰に相視することを得ん  
112 句無人共聯 句は人の共に聯ぬること無し  
113 思將臨紙寫 思將ては紙に臨み写す  
114 詠取著燈燃 詠取ては燈に著けて燃す  
115 反覆何遺恨 反覆す何ぞ遺恨  
116 辛酸是宿縁 辛酸是れ宿縁  
117 微々抛愛樂 微々愛樂を抛ち  
118 漸漸謝葦臚 漸漸葦臚を謝す  
119 合掌歸依佛 合掌して仏に帰依す  
120 廻心學習禪 廻心して禪を學習す

【十三段】